「自慰テロリストやすお」

作　中堂大嘉

【あらすじ】

やすおはオナニーが大好きだ。最高に気持ちいい。今日も楽しくオナニーをしていた。そこに現れた母、昌代。

昌代は見ていない振りをしてその場を去ろうとするが、やすおに引き留められる。やすおはオナニーを見られたあとの、なんとも言えない空気感が耐えられずにいた。

なぜオナニーを見られることが恥ずかしいのか、オナニーをすることはいけないことなのか、議論を交わしながら、やすおはオナニーを日常に変えようと奮闘する。

【登場人物】

やすお（１４）　中学二年生

昌代（３８）　やすおの母

道康（４２）　やすおの父

性の精（？）　性に悩める人々の前に現れる、謎の人物

1.

やすお（14）、ティッシュを数枚取り、オナニーの下準備をする。
やずお「ふんふんふーん♪」
体勢を整え、エロ動画を見るやすお。
やすお、興奮し陰部をしごく。
遠くからやすおを呼ぶ昌代（38）。
昌代「やすお、ご飯」
オナニーに夢中のやすお。
昌代「やすおー！」
オナニーに夢中のやすお。
昌代、入ってくる。
昌代「やすお、ご飯……」
やすお「……」
昌代、その場を去ろうとする。
やすお「待って！」
昌代「……」
やすお「母さん、もう止めにしないか？」
昌代「え？」
やすお「もう止めにしないかって言ってるんだ」
昌代「な、なにが」
やすお「母さん、いま見たよね？」
昌代「え？」
やすお「僕は、オナニーをしている」
昌代「お、なにー？」
やすお「そう、オナニー」
昌代「な、なにそれ？　おいしいの？」
やすお「とぼけたって無駄だ！　保健の時間に勉強したはずだ！　木曜日の6時間目ぐらいに」
昌代「……」
やすお「言い方を変えよう。自慰行為ってやつさ」
昌代「……じいこうい」
やすお「母さん、僕はもういやなんだ。この、何とも言えない空気感。そしてこのあと母さんと過ごす数時間が何より耐えられない」
昌代「……お腹空いたら教えてね」
やすお、昌代を引き止める。
やすお「母さんだって嫌でしょ。あの変な空気」

昌代「……まあ……」
やすお「ご飯の時とかもさあ、なんかこう、気にしてんじゃん。ちら、ちらって」
昌代「そりゃあ気にするよ、なんかいけないことしちゃったと思って」
やすお「あー、そうか。いま問題なのは、僕のオナニーを見てはいけないものって認識があることだ」
昌代「……たしかに、そうね。でもどうやって受け入れたらいいか、分からなくて」
やすお「答えはシンプルさ。悪いことじゃないんだよ、オナニーは」
昌代「それは分かるよ、悪いことじゃないのは。でもそれを見るのは悪い気がして」
やすお「悪いことじゃない。これはもはや授業参観だよ」
昌代「授業参観？」
やすお「そう、これは保健の授業参観なんだ、ライブなんだよ！」
　やすお、陰部を取り外し、オナニーダンスを踊る。
昌代「ストップ！　ストップ！　やすお、やすおわからない、全然ついていけない。そもそもそれ取れるの？」
やすお「そんなことはどうでもいいじゃないか」
昌代「どうでもよくないでしょう！　それはあなたの大事な、その、あの……あれでしょうよ」
やすお「あれってなんだよ」
昌代「その……おー・ちんぽうが」
　昌代、少林寺拳法っぽい動きをする。
やすお「大事だからどこにでも移動して身を隠すことができるんだ。それがおー・ちんぽうなんだ」
昌代「そういうものなの？」
やすお「さて本題に入ろう。これから問題点を洗い出していこうと思う」
昌代「問題点？」
やすお「今まで母さんが遭遇してきた僕のオナニー現場を再現して、どうして受け入れることが出来ないのかを、ちゃんと考えようってわけさ」
昌代「目には目を歯には歯をってこと？」
やすお「ははは、ははは、ははは、ちがう」
　遠くから昌代を呼ぶ道康（４２）。
道康「昌代―？　まだかー？　先に食べるぞー」
昌代「あ、いま行きますー！」
昌代「やすお、また今度話そ、ね」
やすお「逃がさないぞ！」
昌代「やすお」
やすお「母さん！　このままご飯を食べても美味しくない」

昌代「……」
やすお「問題を解決してから、ご飯を食べようじゃないか」
昌代「解決、出来る？」
やすお「大丈夫、僕に任せてくれ。母さん、覚えているかい？　僕が初めてオナニーを見られた日を」
昌代「……そんなの、覚えてない」
　やすお、昌代を睨む。
昌代「……あなたが中学1年生の時」
やすお「そう、僕が中学校1年生の時、オナニーを始めてまもない頃。テスト勉強に飽きた僕は、ベッドに寝転びながらオナニーをしていた」
　やすお、オナニーをする。
昌代「やすおー？　夜食作ってきたよー」
　オナニーに夢中のやすお。
昌代「やすおー」
　昌代、入ってくる。
昌代「やす……」
　昌代、やすおと目が合う。
やすお「ここだ！　ここで何を思った？」
昌代「え？」
やすお「この時、母さんは何を思ったんだよ！」
昌代「何って、なんだろう。ハッてなって」
やすお「ハッてなって？！」
昌代「見ちゃったと思って」
やすお「見ちゃった？」
昌代「悪いことしちゃったなって」
やすお「やっぱりこれだ」
昌代「え？」
やすお「原因はオナニーを悪いこと、恥ずかしいことって考えてるところだ。間違いない」
昌代「……」
やすお「母さんだって、オナニーしてるくせに」
昌代「え、え？」
やすお「……ちょっと待ってて」
昌代「やすお？！」
　やすお、出て行く。
　昌代、そわそわしている。

2.

やすお、女性用玩具を持って入ってくる。
ミステリアスな音楽が流れる。
やすお、ゆったり昌代へ詰め寄っていく。
ミステリアスな音楽、徐々に消えていく。
やすお「母さん、これは母さんのだね？」
昌代「……え、ええ、まあ……これ肩が凝った時に丁度いいんだよねー。ほら」
昌代、女性用玩具で肩を叩く。
やすお、奪い取り玩具を動かす。
玩具「ウィーン」
昌代「ああ！」
玩具「ウィーーーン！」
昌代「あーーー！」
玩具「ウィーーーーーーーーーーーーン！」
昌代「あーーーーーーーーーーーーーーー！」
やすお「これは、母さんのだね」
昌代「……はい」
やすお「自分もオナニーするのに、なんで人のオナニーはいけないの？」
昌代「それは、オナニーってやっぱり1人で楽しむものじゃない？　だから人のオナニーを見ちゃうと、なんかこう、申し訳ないっていうか」
やすお「うーん……確かにそうなんだけど……うーん、あ！」
昌代「なに？」
やすお「一回、立場を入れ替えよう」
昌代「え？」
やすお「だから、母さんがオナニーをして、僕がそれを目撃する」
昌代「やすお？　あなた言ってること分かってる？」
やすお「ああ、分かってる。ちょっと母さんの気持ちになってみたいんだ。なにか掴めるかもしれない」
やすお、振り向く。
やすお「じゃあ、いつでもいいよ」
昌代、オナニーしている振りをする。
昌代「あ、あぁー。あぁー」
やすお「母さん！」
昌代「は、はい！」
やすお「ちゃんとやらなきゃ意味がない！」
昌代「は、はぁ」

やすお「……本気でこいよ」
　昌代、戸惑いながらオナニーをする。
昌代「んっ！　……あぁー……んっ」
　やすお振り向く。
やすお「うっ……想像以上のダメージだ……」
　やすお、膝を突く。
昌代「やすお！　大丈夫？」
やすお「続けるんだー！」
昌代「は、はい！　んっ……あぁー」
やすお「ぐっ！　うおおお」
昌代「たく、や」
やすお「たくや」
昌代「あぁ……ちょっと待てよ、なんて。焦らさないで」
やすお「キムタク？　キムタクか」
昌代「あぁ……もう！」
　やすお、血を吐く。
やすお「カハッ！」
昌代「やすお！」
やすお「ちくしょうめ」
昌代「大丈夫？」
やすお「う、うん。なんとか」
昌代「ど、どうだった？」
やすお「これは、なかなかしんどいね。母さん、ごめんね」
昌代「え？」
やすお「こんな思いをさせていたなんて、思いもしなかった」
昌代「……やすお」
やすお「荒療治だけど、解決方法を見つけた……母さん、付き合ってくれるかい？」
昌代「う、うん」
やすお「オナニーの概念をぶっ壊してやる」
　やすお、ベッドの上でオナニーの準備をする。
やすお「母さん、そこで僕のオナニーを見ていてくれ」
昌代「え？」
やすお「母さんは僕が歯磨きをしてる時、どう思う？」
昌代「どうって、別に……」
やすお「そう、別になにも思わないでしょ。だから、オナニーも歯磨きと同じ様によく見る風景にするんだ」

昌代「やすお、それはいくらなんでも」
やすお「ちょっと辛いけど、そこで見ていて欲しいんだ……それじゃあ、いくよ」
　やすお、オナニーをする。
道康「昌代―？」
昌代「うっ、ああ、んー、ああ、ふーふー。あー、もうだめ！」
　道康、入ってくる。
　昌代、振り向く。
道康・昌代「……」
やすお「母さん！　目を逸らすな！」
道康「……何事だ？」
やすお・昌代「……」
道康「これは、一体どういうことだ」
昌代「これはね、そのー、授業参観！　保健の！」
道康「授業参観？」
やすお「そ、そうそう」
道康「家で、授業参観」
昌代「あの、これには深い事情があってね、その」
やすお「……オナニーを日常に変えたいんだ」
道康「オナニーを日常に？」
やすお「そうさ」
道康「やすお、それは一体どういう」
やすお「父さんもそこで見てて！」
　やすお、再びオナニーを始める。
　昌代、道康、振り向く。
やすお「父さん、母さん、見るんだ！」
　昌代、振り向き、やすおを見る。
道康「昌代」
昌代「見てあげて」
　振り向く道康。
道康「やすお、お前一体なにをしてるかわかってるのか？」
やすお「うおおおおおおおお！」
昌代「ぐ、ぐぐぐぐぐ、ゲホゲホ」
　交代し、昌代がオナニーをし、やすおが昌代のオナニーを見る。
昌代「んんんんんー！」
やすお「ぐぬぬぬぬぬ、あああ」
道康「昌代……お前、それは……」

昌代「あぁ！」
やすお「グハ」
道康「……もう限界だ！　なんだこれは！　もうパニックだ！」
昌代「お父さん落ち着いて」
道康「ニャー！」
やすお「父さん？」
道康「ニャー！　父さんはもう言葉なんて持たない。理性なんて持たない。そうでもしないと、父さんどうにかなっちまいそうだ」
道康、ネコになる。
道康「ニャー！」
部屋の中を歩きまわる道康。
道康「ニャー……ニャー……ニャ、ニャニャニャ……ニャ―……」
惨めな気持ちになる道康。
道康「なんだか……とっても惨めだ」
昌代「落ち着いた？」
道康「ニャー！」
昌代「わ！」
道康「……昌代、何がこんなに惨めか分かるか？」
昌代「え？」
道康「嫁さんがオナニーをしている。こんなに惨めなことはない」
昌代「……」
道康「昌代、どうしてだ」
昌代「……そんな目で見ないでよ……なに、なんなのもう」
道康「昌代」
昌代「そんな目で見ないで！　なに！　あなただってオナニーしてるでしょ！　女はオナニーしちゃいけないの？！」
やすお「そんなことないよ！」
道康「やすお？」
やすお「それでいいんだよ、それでいいんだ母さん。僕達人間には、性欲というものがあるんだ。いけないことじゃないんだ」
道康「なにを言ってるんだやすお。女性には女性の在り方というものがあるんだ。母さんがオナニーしているのを想像するのも嫌だ。考えてもみろ。母さんは、父さん以外の男とセックスするのを妄想して快楽を得ているんだぞ。浮気されてるのと変わらないじゃないか。父さんは認めんぞ」
昌代「あなただって、オナニーしてるじゃない」
道康「男性にはな、子孫を残す本能が備えられているんだ。より多くの子孫を残そうと種を

撒く本能がな。だから仕方のないことなんだ」
昌代「なにそれ。それじゃああなたには理性ってものがないの？　本能を抑える理性がないならただの動物。発情期の猫みたい」
道康「ニャー！　おれを猫呼ばわりか、お前いつからそんなに偉くなったんだ？」
昌代に歩み寄る道康。
昌代「……」
やすお「やめなよ父さん」
道康「いつからそんなに偉くなったんだと聞いてんだ」
昌代「困ったらすぐそうやって」
道康「そうやって？　なんだ？　言ってみろ」
昌代「そうやって自分の権力を押しつけてくるの！　稼いでくるのがそんなに偉いの？」
道康「なんだって！」
道康、昌代に平手打ちをしようとする。

3.

美しく荘厳な音楽が流れる。
戸惑う3人。
性の精、どこからともなく現れる。
性の精、美しく荘厳な音楽に合わせて舞う。
美しく荘厳な音、消えていく。
性の精「呼んだ？」
やすお「いや、呼んでないです」
性の精「馬鹿な事を言うな！」
やすお「え？」
性の精「呼ばれてないのに私が来るわけないだろう！」
やすお「なんで聞いたんだ」
道康「なんだお前は？！」
性の精「わたしは、性の精だ」
道康「性の精？」
性の精「性に悩める所に、我現る。今回はどんなお悩みだ？」
道康「よく分からんが帰ってくれ、別に悩みはない」
性の精「馬鹿な事を言うな！　悩みがないところに私が来るわけないだろう！」
道康「なんなんだこいつは、警察呼ぶぞ！」
性の精「警察はやめてくれ。頼むから警察はやめてくれ」
昌代「性の精さん！　悩み、あります！」
性の精「なに！　はっはっは、やはりそうだったか。内心、本当に悩みがないのかとドキド

キしていた。それでどんな悩みだ？」
道康「昌代！」
昌代「主人が……私にオナニーをさせてくれないんです」
性の精「ほうほう、奥さんにオナニーをさせないと。ご主人、なぜ奥さんのオナニーが許せない？」
道康「お前に答える義務はない。とっとと出て行け。本当に警察を呼ぶぞ」
性の精「呼びたいなら呼ぶがいい。奥さんの顔を見て、わかった。これは深刻な状況に陥っている。警察など構うものか」
昌代「性の精さん……」
道康、警察に電話する。
道康「あー、すいません。不審者が自宅に侵入してるんで、来てもらってもいいですか？ すぐにお願いします」
性の精「電話は終わったか？」
道康「ああ、お前はもうすぐ警察のお世話になるんだ」
性の精「なぜ奥さんのオナニーを許せないんだ？」
道康「だからなんでお前なんかに言わなきゃならないんだ」
性の精「言わないと……不思議な力で言わせるぞ」
道康「な、なにするっていうんだ」
性の精、道康をボコボコに殴る。
やすお「やめろよ！ なにするんだよ！」
性の精、殴り続ける。
道康「わ、わかった、言う、言うから！」
性の精、殴り続ける。
道康「言うって言ってんだろ！」
性の精「すまん、つい夢中になってしまった」
やすお「や、やべーやつだ」
道康「……嫌なんだよ、他の男を想像してるのが」
性の精「なるほど。奥さんを独占したいということだな」
道康「……それは、まぁ」
性の精「しかしお前もオナニーをするだろう。まさか、毎回奥さんを想像してオナニーしているわけじゃあるまい」
道康「そりゃ、そうだけど。男は仕方ないだろ、そういう生き物なんだから」
性の精「男は仕方ない、とは？」
道康「男には子孫を残そうとする本能があるんだ、だから種を撒くのが当たり前なんだ」
性の精「チビスケ、お前はどう思う？」
やすお「え？」

性の精「お前はどう思うと聞いてるんだ？　同じ男だろ？　どう思う？」
やすお「僕は……僕は、オナニーしてもいいと思う。男も女もみんなオナニーしたらいいんだよ」
性の精「なんでそう思う？」
やすお「え？」
性の精「なぜそう思うのかと聞いてるんだ」
やすお「……僕達人間は平等であるべきだと思うんだ。男も女も関係ないんだ。男はこうあるべき、女はこうあるべき、そんな文化はドブに吐き捨てちまって、新しいガムを噛んだほうが楽しいんだぜ」
道康「急にどうした？」
　唾を吐き捨てるやすお。
道康「やすお……」
性の精「このぐらいの子は、急にロックな感じになるもんだ。はっはっはっはっ、はっはっは……」
　性の精、台本を確認する。
道康「舞台上で台本を読むな！」
性の精「間違えるよりいいだろ！　それより、チビスケの言葉を聞いたか？　奴のあのー、あれだ、魂の叫びを」
道康「あ？　ああ」
性の精「正直な、私も何が正しいのかはわからん」
道康・昌代・やすお「え？」
性の精「私も今の嫁さんと結婚して3年になる。ご主人の気持ちも分からなくはない」
道康「結婚してるのか」
性の精「最後まで話を聞け」
道康・昌代・やすお「……」
性の精「何の話をしていたんだ？」
道康・昌代・やすお「……」
性の精「私は何の話をしていたんだ？」
昌代「あの、結婚してどうとか」
性の精「ああ、そうだった。私も今の嫁さんと結婚して3年になる。ご主人の気持ちも分からなくはない」
道康「……」
性の精「だがな、奥さんにオナニーさせないことが正しいのか？　いいや、それは違う。さっきチビスケが言ったように、みんな平等であるべきだ。男がオナニーするのが当たり前で、女がオナニーすることが異常ではないのだ」
やすお「ヒャアッハー！」

性の精「奥さん、どんなときにオナニーをするんだ？」
昌代「ど、どんな時って……なんかストレスが溜まった時とか、しばらくセックスしてない時とか」
性の精「ほう」
昌代「でも、何気ない日でも、する時もあって」
性の精「ふむふむ」
昌代「一日の終わりにビールを飲むでしょう。そんな感じ」
性の精「主にストレス発散ということか」
昌代「まあ、そんな感じです」
性の精「体の調子はどうだ？」
昌代「え？」
性の精「オナニーした後、体の調子はどうだ？」
昌代「なんか、体は軽くなった感じがします」
性の精「聞いたか？　ご主人」
道康「ん？」
性の精「奥さんのオナニーにはストレス発散効果がある。どうだ？　奥さんのオナニーがビールを飲んでいるように見えないか？」
昌代、オナニーポーズをする。
道康「……いや、見えない」
性の精「もっと、想像力を豊かに！」
道康「……」
性の精「ビールを飲む位、日常にするんだ！」
やすお「……日常？」
性の精「じゃあ、一回ビールを飲んでみろ！」
道康「は？」
性の精「奥さん、一回ビールを飲んでみてくれ！」
昌代「え？」
性の精「いいから早く酒を持ってこい！」
昌代「あ、はい！」
昌代、ビールを取りに行く
やすお「そうか、やっぱり僕の考えは間違いじゃなかった」
やすお、ビールを取りに向かう
やすお「世界をぶっ壊してやるんだ！」

4.
性の精「……二人っきりだな」

道康「あ、ああ」
性の精「ジャンケンでもするか？」
道康「いや、いい」
性の精「そうか……あれだな、なんか話すか？」
道康「いや、いい」
性の精「どこに惚れた？」
道康「え？」
性の精「奥さんのどこに惚れた？」
道康「だから、なんでお前みたいな変な奴にそんなこと答えなきゃいけないんだ」
性の精、殴ろうとする
道康「分かった！　言う！　言うから！」
性の精「初めからそうしろ、危うくまた不思議な力を使うところだったぞ」
道康「……んー、なんか恥ずかしいな」
性の精「恥ずかしがることはない、言ってみろ」
道康「……笑顔」
性の精「ん？」
道康「……やっぱり恥ずかしいな。」
性の精「恥ずかしがるな、殺すぞ！」
道康「笑顔だよ、笑顔」
性の精「笑顔？」
道康「ああ、笑顔。昌代はいつだって笑顔なんだ。俺が会社をクビになって、もうどうしようもないって時に……あいつ、笑ってたんだよ」
性の精「……」
道康「笑ってた方が楽しいよって……なんかもう、会社のことなんかどうでもよくなっちゃって。あの笑顔に何度も救われたんだ」
性の精「そうか」
道康「あぁ」
性の精「笑顔か……素敵じゃないか」
サイレンの音が響き渡る。
性の精「どうやらお迎えが来たようだ。ご主人、その気持ち……大切にな」
昌代、やすお、戻って来る。
やすお「性の精さん、やばいよ警察来てるよ！」
性の精「奥さん！　笑顔、大切にな……チビスケ」
性の精、頷く。
やすお、頷く。
性の精、どこからともなく去る。

やすお、昌代と道康にビールを渡す。
道康「やすお？」
やすお「オナニーを日常に変えるんだ！　ビールを飲みながらオナニーをするんだ！」
昌代・道康「え？」
やすお「ビールを飲む＝オナニーにするんだ！」
昌代「でも……」
やすお「そして、父さんは母さんのオナニーを、母さんは父さんのオナニーを見るんだ！」
昌代・道康「……」
やすお「もう、これしか道は無いんだ」
昌代「……やすお」
道康、オナニーを始める。
昌代「あ、あなた？」
道康「母さん、もうこれしか道はないんだ」
昌代、オナニーを始める。
道康、昌代、互いのオナニーを見る。
苦しむ2人。
やすお「父さん！　母さん！」
道康「はあはあ、昌代……笑ってくれ。いつもの笑顔を見せてくれ！」
昌代「道康……」
道康「苦しい時こそ、笑うんだよ。それを教えてくれたのはお前だろ？」
昌代・道康、笑顔を浮かべながらオナニーを続ける。
ぎこちない笑いが、徐々に楽しげな笑いに変わっていく。
やすお「こ、これは」
美しい音楽が3人を包んでいく。
パトカーの中から3人の方を見る性の精。
やすお「やっぱり、オナニーは最高だ！」

5.

やすお、オナニーをしている。
昌代、入ってくる。
目が合う2人。
やすお・昌代「……」
笑顔を浮かべる2人。
昌代「洗濯物ここに置いておくわよー」
やすお「うん！」
昌代、微笑みながら出ていく。

笑顔でオナニーを続けるやすお。
道康、入ってくる。
道康「お、やってるなぁ」
やすおに近づく道康。
道康「おぉ、これはなかなかハードなやつだなぁ」
やすお「うん！」
道康「今度、父さんにもいい動画教えてくれ」
やすお「うん！」
性の精、どこからともなく現れ、舞う。
美しい音楽が空間を包んでいく。
オナニーを続けるやすお。
昌代、新しいオナニーグッズを手に持ち登場し、舞う。
オナニーを続けるやすお。
道康、昌代と手を取り合い、舞う。
やすお「ヒャアッハー！　やっぱりオナニーは」
全員「最高だ！」

おわり